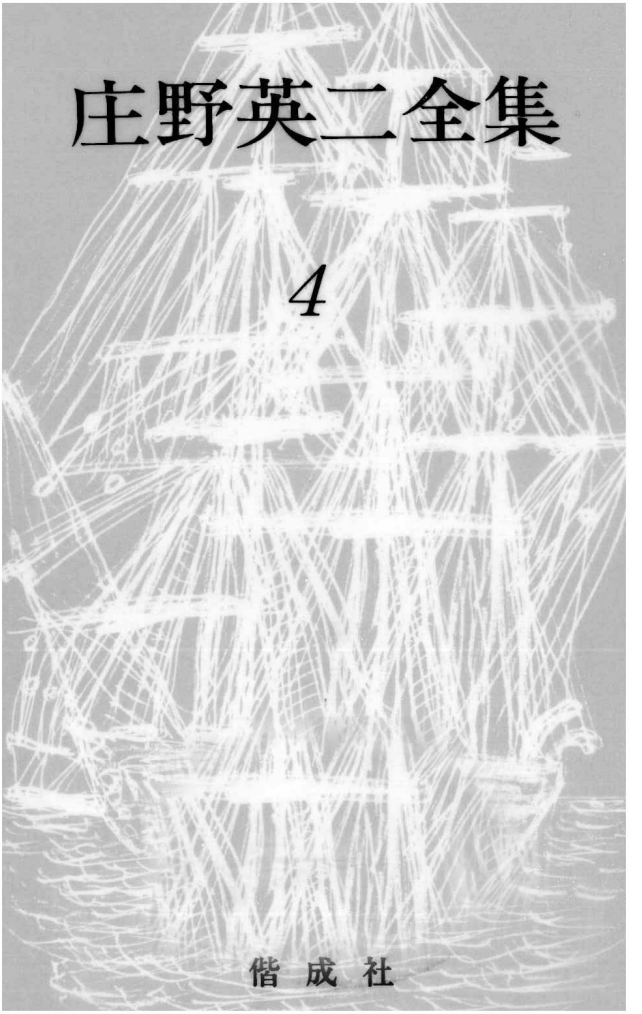
生野團全集 4

庄野英二全集

4



偕成社

庄野英二全集　第四巻

印　刷　昭和五十四年十月二十五日
発　行　昭和五十四年十一月十日
著　者　庄野英二
発行者　今村　廣
発行所　株式会社　偕成社
〒一六二　振替　東京五―一三五二番
東京都新宿区市ケ谷砂土原町三の五
電話　東京（〇三）二六〇―三二二一（代）
印　刷　新興印刷製本株式会社
製　本　文勇堂製本工業株式会社
定価　二五〇〇円
乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。
©EIJI SHÔNO Printed in Japan 1979

庄野英二全集　第四巻

装幀 カット　庄野英二
装幀協力　山高　登

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目

次

鹿の結婚式……9
鹿の結婚式 11
アザラシの星 17
ホワイト レストラン 24
メサイアの夜 28
網走 33
海のメルヘン……37
水の上のカンポン 39
大きいプラオ 56
月とシャム猫とシャムのお姫さま 70
人魚と星 99

たのしい森の町……131
にぎやかな家……165
はじめに 167
畑 169
設計 182
歩測と目測 190
風見(かざみ) 195
ブリッジ 199
ハッチ 205
かき 207
マスト 212
門 216

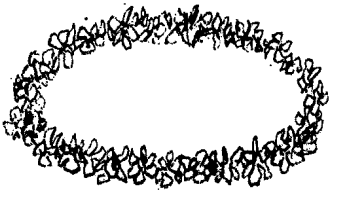
にわとり 220
ぶどう 229
ごちゃごちゃの間* 234
ざしき 240
はと 247
ばら 257
オリーブ 261
ライラック 268
つた 271
はまゆうとたんぽぽ 271
うばめがしとげっけいじゅ 273
おうむ 278
おしゃべりおうむ 283
二わのおうむ 286
なんきんはぜ 289

港のメルヘン……293
串本……295
比田勝……298
幻想小曲……301
カレリヤ島……303
サルのコーラス……320
ムルベケル島樹譜……324
不運な旅行者……335
小さなつり橋……344
迷った二匹の小羊……354
雪の思い出……364
ガチョウ牧場……367

駅弁・ヴェガ（Vega）・X legged（ガニ股）　374
〈一花書〉　ハハコヨモギ　380
オペラ「マントヒヒ幻想」　383
なつかしのコトブキ島　389
ハトをとばす　393
メガネザル　397
あとがき　……402
庄野英二全集　第四巻解題　戸塚　惠三……404
庄野英二覚え書　前川　康男……409

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鹿(しか)の結婚式



え

鹿の結婚式

「つぎの満月の朝、鹿の結婚式が行われますから、御都合がよければ御参列ください。式場は大岩山の頂上です。夜明け前に御到着ください。服装は平服でけっこうです。」

右のハガキを僕は鹿の老人からうけとった。鹿に老人というのはおかしいが、老人のような感じの鹿のことだから、そう呼ばさせていただくことにする。

村で獣医を開業している僕には、動物の知りあいも多い。

鹿の老人も、いつか後脚を一本骨折して僕のところにやってきた。僕はギプスをあてて治療した。骨折が全治してからギプスをはずしたが、ひざの関節が自由に曲がらなかった。骨折は完全に治っているのであるが、ひざの部分もギプスをまいてあったため筋肉が固まってしまったのであった。それは人間でも鹿でも同じことなので、何日かマッサージをしたり、じょじょに運動しているうちにしだいに治ってしまうのがふつうであった。

若い人間や鹿は、筋肉の回復も速いのであるが、老人になるほど暇がかかるものである。

鹿の老人は、毎日僕の家へマッサージをしてもらいに通ってきた。僕はマッサージをしながら老人

といろいろの話をした。老人は話好きだったので、世間話や、森の動物たちのいろいろと面白い習性なども語り聞かせてくれた。

あるとき、僕は老人にマッサージをしながら、

「鹿の社会にも、冠婚葬祭などの儀式はあるのかね。」

とたずねてみた。

すると、

「ありますとも、ちゃんとしきたりは折り目正しく行われていますよ、なんなら、一度、結婚式でもごらんになってみては、いかがですか。」

といった。

「それはありがたい、機会があればぜひ見せていただくことにしよう」といって僕は老人に約束しておいた。

間もなく、老人の後脚が、びっこもひかず走れるようになったので、老人は僕の家へこなくなってしまっていた。

それから何か月かたった。僕は鹿の結婚式のことなどすっかり忘れてしまっていた。

僕は結婚式の案内状を手にして、喜んだものの、文面が少しふにおちなかった。

「つぎの満月の朝」というのは、いったいどうしたことであろう。「満月の晩」と書いてあるのならばよくわかるのだが、「満月の朝」というのはどう考えてもおかしかった。書きちがいではないだろうか。しかし、「夜明け前に御到着ください」と書いてあることを考えると、やっぱり朝にちがいな

い。書きちがいではなさそうであった。

大岩山というのは、僕の村から見えるいちばん高い独立峰である。僕も学生時代から四、五回登ったことがある。裾野は落葉松の樹林帯で、その上が、シャクナゲの群落である。シャクナゲの群落の上は、ハイマツ地帯で、ハイマツ地帯の上は、ハゲ山になっていた。頂上には、高さ三メートルもある方解石の形をした玄武岩の大岩がつったっていた。そして、その大岩を十二の中岩（大岩でも小岩でもない）が指輪のようにとりまいているのであった。

だれでも、大岩山に登ると、苦心して玄武岩の大岩によじのぼり、下界を見おろして大声で叫ぶのであった。しかし、玄武岩の頂上は水平になっていないので、用心をしないとすべり落ちるおそれがあった。

つぎの満月の朝、僕は鹿の結婚式に参列するために大岩山に登っていった。夜明け前に、頂上に到着しなければならないので、僕が家を出たのは前の晩であった。片手に懐中電燈を持ち、背中には大きなリュックサックをかついでいた。

リュックサックの中には、僕が途中で食べる弁当と、紅茶をいれた水筒のほかに、いろいろな贈り物がはいっていた。いろいろな贈り物の明細表はつぎのとおりである。

○小さな銀の鈴二つ――新婚の鹿夫妻への贈り物を何にしようかと考えたすえ、銀の鈴にした。細い銀のくさりでつながれていて、首にかけると美しい音が鳴る。

○鹿風琴一つ――これは鹿の老人（前に骨折をした）への贈り物である。以前、老人が僕のところへマッサージにきたとき、僕が手風琴で、「巴里祭」の曲を弾いて聞かせてやると、とても

感激していたから手風琴を贈ることにした。人間は手で弾くから手風琴だが、鹿は脚で弾くことは少しむずかしいのにちがいない。老人は立派な角を二本持っているが、角は手のように動かすことはできない。手風琴の片方を木の枝にかけるか、二頭の鹿が角にかけるならば弾くことが可能である。

○紅白のぶどう酒各一本――これは一般参列者のため。
○堅センベイ百枚――これも一般大人用。
○ウエハース百枚――参列者の幼児用。
○タマゴの形をしたチョコレートボール（大人小ども共用）。
○紙風船百個。
○コメット百個。
○色とりどりのリボン。
○紙皿、紙コップ。
○レースペーパー。
○バラの香水、アイシャドウ、ルージュ、マニキュア道具一式（花ヨメ用）。

もっと、いろいろ持っていきたかったが、リュックサックにはいりきらないので、あきらめなければならなかった。

僕は道にも迷わないで、やっと夜明け前に大岩山の頂上に到着した。

地平線の彼方の空が、バラ色にほのかに明るくなっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com